

2021 年度 特別支援教育フォーラム

2021 年 4 月 21 日
和歌山大学特別支援教育
コーディネーターフォーラム事務局
info-seforum@ml.wakayama-u.ac.jp

第 97 回和歌山大学特別支援教育コーディネーターフォーラム

「特別支援教育におけるコンサルテーションとは」 和歌山大学教育学部 武田鉄郎

今年度のフォーラムは、Zoom を使用したオンライン開催となりました。

初回は、4月21日（水）18時から、和歌山大学教育学部の武田鉄郎が講演いたしました。お忙しい中、50名の方がご参加くださり、大変有意義なフォーラムになりました。

講演内容

コンサルテーションとは、対人援助の諸分野において、異なる専門職の間で連携・協力する行為のひとつを指す概念である。一方の専門家が抱える職業上の問題を他方の専門家が援助することである。援助する側をコンサルタント、援助される側をコンサルティとよぶ。

コンサルタントの基本的態度は、①コンサルティの問題解決や資質の向上を「黒子」として援助する②ずかずかと踏み込んでコンサルティの所属するチームワークを乱すようなことはしない③悪者をつくらない（誰かを悪者にしない）④チームワークの形成を支援する⑤コンサルティの活躍を引き出すのが役割：指導するのではない、「手柄はコンサルティ」⑥コンサルタントの単独での対応はさける⑦自分の手におえない問題については、不確かな助言はしないで専門家などの意見を仰いだり、そちらにつなぐようにする⑧コンサルタントのチームをつくって動く。

学校におけるコンサルテーションの目的は、子どもや教師などの困り感を軽減することであり、コンサルティは子どもや教師である。子どもの実態を把握し、教師に対して子どもの関わり方についての具体的な対応策を助言することが、コンサルタントの役割である。指導・支援について協議する際には、ASEBA などの検査結果があれば、子どもの状態を共通理解することができる。このように、客観的に理解できる材料を用意して、コンサルタントの基本的態度を心掛ければ、教師が納得できる対応策を助言できると考える。

参加者の感想より

- ・今日のお話にあった「コンサルタントの基本的態度」は本当に大切なことだと思います。「黒子として援助する」「よその家に土足であがらないこと」「悪者をつくらない」など意識することでチームを大切にしながら一人ひとりの意見を尊重したり、話し合いのしやすい環境をつくっていきたりするのだと思います。「積極的相互依存」という言葉のとおり、協働チームとして、チームみんながそれぞれの役割を担って子どもたちを支援できるような関わりをしていけたらと思います。
- ・コーディネーターとして、教育と心理学の両方の専門的な知識が必要だと感じました。子どもや親御さんの不安な気持ちに寄り添いながら、適切な働きができるようこれからも勉強していきたいです。

2021 年度 特別支援教育フォーラム

2021 年 5 月 26 日

和歌山大学特別支援教育

コーディネーターフォーラム事務局

info-seforum@ml.wakayama-u.ac.jp

第 98 回和歌山大学特別支援教育コーディネーターフォーラム

「特別支援学校におけるセンター的機能の充実を目指して」

和歌山大学教育学部

武田鉄郎

和歌山県立和歌山さくら支援学校

中谷 愛

和歌山県立紀伊コスモス支援学校

黒江純子

和歌山県立きのかわ支援学校

寺尾朗代

今回は、5月26日（水）18時から、和歌山大学教育学部の武田鉄郎が講演いたしました。さらに、和歌山県立和歌山さくら支援学校 中谷愛氏、和歌山県立紀伊コスモス支援学校 黒江純子氏、和歌山県立きのかわ支援学校 寺尾朗代氏をお迎えし、各校の活動について詳しくお話しいただきました。

お忙しい中、65名の方がご参加くださり、大変有意義なフォーラムになりました。

講演内容

講師：和歌山大学 教育学部

武田鉄郎

特別支援学校の特別支援教育コーディネーターは、地域の小中学校等の要請に応じて、障害のある児童生徒への教育に関し必要な助言又は援助を行い、地域の特別支援教育のセンター的機能を果たしている。この役割を果たすためには、障害のある児童生徒の指導方法などの知識、学級づくりなどの理論・技能を会得することや、児童生徒の指導に悩みがある教職員や、保護者の学校への要望など、ニーズを把握することが大切である。また、教育機関、福祉機関、保健・医療機関などと連絡・調整を行い連携することも役割である。

講師：和歌山県立和歌山さくら支援学校

中谷 愛氏

地域のセンター的機能の役割として、学習面や情緒面等で気になる障害のある幼児児童生徒、保護者、関係職員を対象にした教育相談、学校間や居住地校等の交流、関係機関との連携を行っている。理解啓発としては、地域の小・中学校に対して、本校の教育や実践等の紹介など、特別支援教育に関する情報を提供している。

地域の小学校の「特別支援学級担任会」に参加して、各学校の児童の様子を聞いたり、児童への対応、授業での工夫、教材の紹介等を行っている。また、「河西ブロック特別支援連絡協議会」では、児童生徒についての情報共有を行い、小・中学校・特別支援学校間の引き継ぎ、連携を行っている。その他、地域の小・中学校から本校に進学した児童生徒の様子を伝えたり、本校の取り組みについて情報共有を行っている。

講師：和歌山県立紀伊コスモス支援学校

黒江純子氏

校内支援として、アセスメントや発達障害についてなどの動画の受講や、外部講師を招いての校内研修などを行っている。また、アセスメントの相談から、スクールカウンセラーや各関係機関などと繋ぎ連携が行われるようにしている。校外支援としては、来校や訪問による教育相談・巡回相談や、地域向け研修会の開催、公開授業や公開研究会もを行っている。

地域向け研修「サマーセミナー」は、本校で企画し開催している。このセミナーでは、自

立活動、WISC-IV、教材についてや、子供とのむきあいかた、教育相談などの研修を行っている。

講師：和歌山県立きのかわ支援学校

寺尾朗代氏

地域支援として、巡回相談・教育相談などの地域相談支援や、本校への就学や進学相談を行っている。また、ホームページで、状態把握の方法や不登校支援についてなどの情報提供を発信している。校内支援として、スクールカウンセラーを活用して、担任へのアドバイスや生徒のカウンセリングを行っている。また、校内環境調整として、教室にカーテンやタイムタイマーを設置するなどの提案を行っている。

地域の保育園、幼稚園・小・中・高校や児童発達センターを対象とした、「校区内特別支援教育コーディネーター連絡協議会」を開催している。この教議会の趣旨は、特別支援教育に関する情報を共有し、情報提供、連携を行うことである。この他にも、「地域特別支援教育等連絡協議会」を開催して、医療や福祉など他職種で情報共有し連携を行っている。この協議会では、家庭基盤の弱い家庭の対応や、愛着に問題のある児童生徒についての対応等について事例をもとに協議している。

参加者の感想より

- ・じっくりと話を聞くこと、きめ細かい支援を行うこと、地域と共に学びあって全体で成長していくこと、チームで連携しながら支援を行っていくなど、センター的機能と役割について大切なことを学ぶことができました。
- ・特別支援学校のセンター的機能の実際の取り組みを3校紹介いただき、それぞれの学校の具体的なイメージを持つことができた。同じ県下の特別支援学校でも、それぞれに違う特色があり興味深かった。支援部の取り組みを進めるに当たり、様々な種類の検査の知識をつけることは必須であると改めて思った。
- ・校内支援では、クラスにパーテーションを使用して学習環境を整える支援や事例検討会を行っていることや校外支援では高校への支援を行っていることなど、各校の特色あるセンター的機能について理解できました。それぞれの学校の特色を活かした支援やセンター的機能を果たしていくとともに、今回のフォーラムのような機会を利用して情報共有し、県下の支援学校がつながり協力し合うことで支援の輪が広がっていけばいいなと思いました。
- ・それぞれ支援学校の教育相談のニーズは、学校の所在地により違ってくるのだなあと思いました。オンラインのシステムが進んできているので、支援学校間の連携もそれらを使用して細やかな連携をとれると、もっとニーズに応じた対応ができるのではないかなと思いました。
- ・校内支援、校外支援ともに、分掌やコーディネーターだけでなく、広く関係機関と連携して取り組むことが重要だと改めて確認できました。校内支援においては、どの学校もアセスメントに力を入れられていることが分かりました。各校でアセスメントの方法にも特色があり、知らないツールもあったのでよい機会になりました。ありがとうございました。

2021年6月23日

和歌山大学特別支援教育

コーディネーターフォーラム事務局

info-seforum@ml.wakayama-u.ac.jp

2021年度

特別支援教育フォーラム

第99回和歌山大学特別支援教育コーディネーターフォーラム

「発達障害のある人・家族・支援者への相談活動について」

和歌山大学 教育学部

竹澤大史

和歌山県発達障害者支援センター「ポラリス」所長

辻幸代氏

今回は、6月23日（水）18時から、和歌山大学教育学部の竹澤大史が講演いたしました。さらに、和歌山県発達障害者支援センター「ポラリス」所長 辻幸代氏をお迎えし、「ポラリス」での実際の相談活動の様子や地域の社会資源について詳しくお話しいただきました。

お忙しい中、47名の方がご参加くださり、大変有意義なフォーラムになりました。

講演内容

講師：和歌山大学 教育学部

竹澤大史

発達障害者支援地域協議会は、自治体内の支援ニーズや支援体制の現状等を把握し、市町村又は障害福祉圏域ごとの支援体制の整備の状況等も検証している。また、発達障害者支援センターの拡充や発達障害者地域支援マネージャーの配置、その役割の見直しや検討も行っている。

発達障害者支援センターでは、発達障害者及びその家族からの相談に応じ、適切な指導や助言を行う。また、関係機関との連携強化や各種研修の実施により、発達障害に対する地域における総合的な支援体制の整備を推進している。

講師：和歌山県発達障害者支援センター「ポラリス」所長

辻幸代氏

ポラリスでは、障害の診断がなくても、どのようなライフステージでも支援の対象である。発達障害のある方の相談は、事前情報（相談者のアセスメント）と直接観察の情報を総合し助言提案している。相談の際には、①視覚的に情報を提示する（理解を助けるため）②具体的に肯定的な表現を心掛ける（比喩表現や皮肉は正しく通じない）③見通しを持たせる（スケジュールを伝える）④感覚過敏への配慮、これら4点について特に注意して、穏やかでわかりやすい対応を心掛けている。

来所や保健所巡回による相談支援のほか、就労支援、講演会開催などの普及啓発事業、和歌山ペアレント・メンター事業の運営サポートも行っている。

参加者の感想より

・発達障害がある人の一生で、その時々での適切な支援が、彼らに立ちはだかる壁を乗り越える大きな力になると思いました。学校では、人の礎を作る大事な期間に関わる一方で、卒業後の長い人生を全てサポートすることはできない為、在学中にこのような機関へ繋げることの重要性を感じました。

・お話を聞いていて特に心に残ったのは、『信頼関係を築く』というところです。相談に来ることが難しいケース、そもそも相談が苦手な人、という様々な相手を想定して、相談の中にも見通し（見てわかる）の支援や、コミュニケーション支援等を取り入れて、「相談してよかった」「この人に相談できた」という経験を重ね、信頼関係を築くことの大切さは聞いていて納得！でした。学校現場での、様々な家庭や保護者、児童生徒の対応にも通じるところがあるなと思いました。ありがとうございました。

2021 年度 特別支援教育フォーラム

2021 年 8 月 24 日
和歌山大学特別支援教育
コーディネーターフォーラム事務局
info-seforum@ml.wakayama-u.ac.jp

第 100 回和歌山大学特別支援教育コーディネーターフォーラム

「障害のある人のライフステージに応じた発達支援の現状と課題」

司会進行 武田 鉄郎（和歌山大学教育学部）

講演 江田 裕介（和歌山大学教育学部）

山崎由可里（和歌山大学教育学部）

古井 克憲（和歌山大学教育学部）

竹澤 大史（和歌山大学教育学部）

今回は、8 月 24 日（火）10 時から、和歌山大学教育学部特別支援教育学教室の教員が、障害のある人のライフステージに応じた発達支援について講演しました。お忙しい中、141 名の方がご参加くださりました。講演後は、皆様と意見交換を行い大変有意義なフォーラムになりました。

題 名：幼児期における発達支援の現状と課題

竹澤大史

発達障害の疑いがある児童の発見は、市町村によって発見の割合にばらつきがあり、乳幼児検診で見逃されている可能性がある。発見された後は、保健師の経過観察によることが多く、市町村の事業を利用している。

発達支援の現状は、保護者から相談があった場合や困っている場合は、保育士や教員が対応し、必要に応じて相談センター等と連携を図り支援している。また、相談機関や医療機関の案内も行っている。

年齢別に障害児サービスの利用者数を見ると、どの年齢においても毎年増えおり、また、5 歳児の利用者数が最も多くなっている。デイサービスなどの障害児通所事業所における保護者の利用ニーズは、社会性やコミュニケーションスキルの獲得、感性と表現力の向上を重視している。

題 名：児童期における発達支援の課題

江田裕介

児童期は、学習能力の発達や知識の習得、身体の組織的な成長など、大きく成長と変化が見える時期である。また、家庭で過ごすことが中心である生活から、学校を中心とした生活に変わり、学業や社会的集団などへの適応が課題となる。

この時期の支援は、通院やリハビリなどの医療・保健、訪問看護やデイサービスなどの福祉、一般就労や授産施設などの就労、学校で取り組んでいる情操の教育、各教科等の学習や自立活動などの教育である。これらの 4 つの関係機関、医療、福祉、就労、教育が連携を図りながら支援していくことが求められるが、管轄が異なるため連携が取りづらい現状がある。そして、連携して支援をする際に重要となるのが、個人情報の保護に関することである。子どもの情報を各機関に伝えていくには、保護者の同意が必要になる。専門機関と連携をスムーズに行うには、保護者との関係を密にして信頼関係を築き、児童の情報を他機関へ報告できるようにすることが大切である。

題 名：青年期における発達支援の現状と課題―「自立」と「自律」の視点から― 山崎由可里

成年期は、生きていくうえで基礎となることを学ぶ学校教育の終盤で、職業生活が中心の時期である成年期への移行の時期である。それは、様々なことを学んでいく積み重ねの人生から、これまでの学びや経験したことから振り返る、振り返りの人生への移行時期でもある。

学校教育で学んだことを発展させていくには、継続した支援が必要となる。そこで、特別支援教育の生涯学習として、卒業後の学びや交流の機会を与える場を設定していくことが挙げられ、この取り組みは、家庭・学校・社会が連携し合って進めていかなければならない。

また、一般高校では進学する生徒が大半であるのに対して、特別支援学校では高等部を卒業後に進学する生徒は少ない。発達の歩みがゆっくりな分、時間をかけて学びを深められるように教育を受ける機会を延長することが必要である。

題 名：障害のある人の成人期以降における家族から社会へのケアの移行 ：社会的支援の全体像

古井克憲

幼児期・学齢期は、保護者が子どもの意向を反映して必要な社会資源を選択していた時期であるが、成人期以降は、本人に選択権が移行する時期であり、日常的なケアも家族から社会に移行されていく時期である。そのため、なるべく早い時期から他の人との関わりを持ち、支援をうける経験や地域生活を送る経験を積み重ねることが大切である。それらの経験から他の人への信頼感を育むことが、成人期以降の「自立と社会参加」を考える上で教育支援の重要な課題である。

社会的支援として、障害者総合支援法に基づく福祉サービス、介護保険制度、成年後見制度、日常生活自立支援事業がある。それらの制度の活用も含めて、長期間に渡るケアプランニングについて検討していく必要がある。その際には、家族を含め周囲の人たちの考えや進め方が、本人の意思と生活の質の向上に沿っているか確認することが重要である。

参加者の感想より

- ・ライフステージに応じた発達支援の現状と課題を理解し、各ステージに引き継いでいくための支援の大切さを改めて考えさせられました。児童期の子ども達と関わり教育を行っていますが、その子自身の青年期以降までを見通しを持って支援を行っていかれたらと思いました。
- ・支援していく際に、保護者との連携がとても重要であることを再確認できました。そこで、保護者に寄り添う気持ちを大切に、説得ではなく納得してもらうこと、選択できるような準備をしておくことなど、基本となることを忘れずに、保護者とよい連携を図れるようにしていきたいと思いました。
- ・「依存しながら自立していくことの大切さ」が印象に残りました。進路を考える上で、助けを求められるような場や関係づくりについて、私たち教師がその方法を提供できるような支援が必要であると感じました。見通しと選択肢を示す教育や支援を考え、本人の意思を尊重し、「説得ではなく納得」できるように信頼関係を築いていきたいと思います。

2021 年度 特別支援教育フォーラム

2021 年 9 月 29 日
和歌山大学特別支援教育
コーディネーターフォーラム事務局
info-seforum@ml.wakayama-u.ac.jp

第 101 回和歌山大学特別支援教育コーディネーターフォーラム

「パーソン・センタード・プランニングと意思決定支援 ：背景と基礎的内容」 和歌山大学教育学部 古井克憲

今回は、9 月 29 日（水）18 時から、和歌山大学教育学部特別支援教育学教室の古井克憲が「パーソン・センタード・プランニングと意思決定支援：背景と基礎的内容」について講演しました。お忙しい中、55 名の方がご参加くださりました。講演後は、意思決定支援などについて、参加された皆様と意見交換がなされ大変有意義なフォーラムになりました。

講演内容

パーソン・センタード・プランニングとは、脱施設化をもとに体系化されたもので、知的障害者の地域生活を本人の意思や希望を重視して支える、本人を中心に据えた計画である。パーソン・センタード・プランニングの理念が意思決定支援のベースとなる考え方となっている。

意思決定は「思いを」決めるという決定の対象に焦点を当てるのに対し、自己決定は「自分で」決めるという決定の主体に焦点を当てている。自己決定の基本は自分のことは自分で決めることであり、意思決定支援は自己決定が前提となる。そして自己決定は代行すべきものではなく、自己決定に関わる支援を確保・充実させて保障すべきものとされている。

特別支援教育でも「自己決定・自己選択」は重視されている。また、生徒たちの意思を尊重する教育でないとならない。嫌なことがあれば、その気持ち（意思）をもってもよいこと。そうした気持ちを表したり、伝えたりしても良いことを教えていくことも必要である。

今後の課題としては、意思決定は日々の営みの中で行われているので、日常での意識的・意図的な取り組みが求められる。また、コンサルテーションや連携、共同の場面での本人を中心に据えた意思決定支援、特別支援教育での意思決定支援の実態把握も重要である。他にも意思は、「YES」か「NO」を尊重するのはもとより「どちらでもない」「いやではない」等もあるバリエーションで捉えることも必要である。

参加者の感想より

- ・子どもと関わる際に、言葉からの発信だけを手がかりにするのではなく、表情やしぐさなどさまざまな要素から子どもの思いを汲み取り、また保護者の方の意見を聞きながらよりよい支援ができるようにしていきたいです。一方で、保護者の願いがとても強く子ども本人の思いより高い願いを持っている方もいます。また、子ども自身が就職する際、自分の能力よりを高いところを希望することもあります。そのような場面に直面した時、今回の話で言われていた「必要な情報を提供して説明する」ことをまず行って進めていけたらと思います。

2021 年度 特別支援教育フォーラム

2021 年 10 月 27 日
和歌山大学特別支援教育
コーディネーターフォーラム事務局
info-seforum@ml.wakayama-u.ac.jp

第 102 回和歌山大学特別支援教育コーディネーターフォーラム

「特別支援教育におけるオンラインの遠隔授業の実践課題」 和歌山大学教育学部 江田裕介

今回は、10月27日（水）18時から、和歌山大学教育学部特別支援教育学教室の江田裕介が「特別支援教育におけるオンラインの遠隔授業の実践課題」について講演しました。お忙しい中、51名の方がご参加くださりました。講演後は、遠隔授業の必要性や課題について、参加された皆様と意見交換がなされ大変有意義なフォーラムになりました。

講演内容

遠隔教育は、2015年に公教育として位置づけられ、2018年あたりから遠隔授業の実践と実証が行われるようになった。しかし、2019年度に行われた学校におけるICTを活用した教育の実態調査では、全ての学校で実施または一部の学校で実施している自治体は、全体の22%にとどまっていた。2020年になると、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、これまでの生活様式が一変し、学びの教育現場も例外ではなく、今まで以上に遠隔・オンライン学習の必要性、重要性が強調されるようになった。

特別支援学校では、障害の種類や程度等によって物理的な分離が生じることや、感染症対策における集団生活の回避のために遠隔授業は必要である。また、ITCの活用により情報処理能力の偏りを改善できることや、重度障害者にコミュニケーションの環境条件を整えることもできる。これらのことからITCを活用した授業は、障害児童の教育保障のために必要な取り組みである。

重度障害者のオンライン家庭学習においては、教員が直接的に関わることができないため保護者の参加が必要になる。そのため、保護者のITCの利用を含む対応のスキルなどの負担が課題となる。その他にも、児童生徒の感情の伝達、触感に対する刺激を伝えることの困難、触れ合いの不足、空間や場面の共有が行えないこと等が課題として挙げられる。これらの課題は、保護者の関わりを最小限にとどめる授業や、絵カードの掲示や合図のような補助手段を導入するなどの工夫により軽減できると考えられる。

参加者の感想より

- ・障害の重い子どもへの遠隔教育は、支援がなければ成立しないし、画面越しで反応を読み取るのが難しいです。今は、ブロックを超えて授業の交流が出来ないので、活動を共有することが出来る有効な手段だと考えています。
- ・特別支援教育でのICT活用は、AACの面で広がり可能性は大いにあり、それが合理的配慮にもつながると思います。特別支援教育では、障害によって生活経験が少なくなってしまうがちなために大事にしてきた体験活動はこれまでどおり重視しながら、ICTを活用した授業も取り入れるといった融合した教育が大切ではないかと思っています。

2021 年度 特別支援教育フォーラム

2021 年 11 月 24 日
和歌山大学特別支援教育
コーディネーターフォーラム事務局
info-seforum@ml.wakayama-u.ac.jp

第 103 回和歌山大学特別支援教育コーディネーターフォーラム

「生涯にわたる学びと自己実現・居場所・なかまづくりの試み」

和歌山大学教育学部 山崎由可里

麦の郷ゆめ・やりたいこと実現センター 藤本綾子氏

夕刻のたまり場につどっているみなさん

今回は、11 月 24 日（水）に、粉河の山崎邸から、和歌山大学教育学部の山崎由可里が講演しました。さらに、麦の郷 ゆめ・やりたいこと実現センター 藤本綾子氏をお迎えして、センターでの取り組みについて講演いただき、センターで実施している「夕刻のたまり場」に集っている皆さんにもお話を伺うことができました。お忙しい中、33 名の方がご参加くださり、講演後は皆様と意見交換がなされ大変有意義なフォーラムになりました。

講演内容

講師：和歌山大学 教育学部

山崎由可里

2017 年、文科省は、障害者の学校卒業後の学びや交流の機会整備、生涯のライフステージを通じた学習活動の充実に向けて障害者学習支援推進室を設置した。2018 年、障害者の生涯学習活動に関する実態調査を行った結果、「進学」という選択肢が不十分で、且つ行政社会教育による生涯学習の機会も未整備であることがわかった。

2018 年から、学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業として、障害者の多様な学習活動を支援するための実践研究や人材育成のための研修会などに取り組むことになり、今年度も継続して取り組まれている。

講師：社会福祉法人 麦の郷 ゆめ・やりたいこと実現センター

藤本綾子氏

2018 年度から、「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」に採択されている。今年度は、「地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進」を受託し行政と一緒に取り組んでいる。

ゆめ・やりたいこと実現センターでは、みんなで「ゆめ」や「やりたいこと」をみんなで実現できる場になるよう、ゆっくり話したり講座で学んだり、それぞれの居場所となる「夕刻のたまり場（居場所）」や、誰かが発信した、やりたいことや願いをみんなで経験する「やりたいこと講座」を開催している。また、関係機関や団体等と連携を図りながら活動を行うために連携協議会を開催している。

参加者の感想より

- ・夕刻のたまり場に来ている当事者の方の話の中で、「やらされているなら誰でもできる、でも挑戦しようとするのは僕だけ（僕の気持ち）」とおっしゃっていたが、自分たちのやりたい気持ちから活動が成り立ち、実現することや、仲間と一緒に時間と空間、楽しい気持ちを共有することがその場にはあることが伝わってきました。自分のしたいことや興味は特定のものであっても、仲間と一緒に共有することで新しいことにチャレンジする経験や新しい発見があり、興味や世界が広がることもあるが、やりたいこと実現センターではそういうことが行われているのだと思いました。